

<前回：創発理論と次元論>

(1) 脳科学の動向と心身(心脳)問題

1. 1980年代以降、脳科学は周辺の関連領域を巻き込みながら急速な発展を示している。
2. ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うか——宗教多元主義から脳科学への応答』。
脳と心の関係をめぐる三つの立場：心脳同一説、随伴現象説、心脳二元論
ヒック：随伴現象説はより洗練された自然主義ではあるものの、しかしそれも心脳同一論と同じ論理的欠陥を抱えている（あるいは、結局は同一論に帰着する）。
3. 自然主義における、強い（ハードな、狭い）と弱い（ソフトな、広い）との区別。後者と宗教とは必ずしも対立するとは限らない。自然と歴史の秩序・法則と神思想との両立性。↓

心脳問題をこの方向で考える。一元論と二元論の二分法を再考する。

現在の「心の哲学」の議論は、随伴現象説（弱い自然主義）へと移行している。

(2) システム理論と心の創発性

5. 一般システム理論の三段階
6. オートポイエーシス：マトゥーラとヴァレラによって、生命体に妥当する組織原理として導入（生命システム）。システムは自らの働きによって自身の組織を継続的に産出する。細胞は閉鎖的システム（一つの作用する統一体）であり、それによって環境との接触（エネルギーや物質の交換、開放性）を行う。細胞は環境との交換を自ら制御する。閉鎖性と開放性とは相互補完的な関係にある。オートポイエーシスのシステムは自律的(Autonomie)ではあるが、自足的(Autarkie)ではない
7. 生命現象についてどのような考察を行うにせよ、「生命組織が全く通常の原子によって作られていること」を念頭におく必要がある（存在論的一元論）。生命体は無機物質を構成するのとは異なる特殊なモノから成り立っているわけではなく、生命体は物質でもある。したがって、問題は物質から化学進化を経て生命がいかに生成するのかを物質を構成する原子の変化——これを規定するのは物理学の諸法則である——とは別の仕方でも説明することであり、これが生物学の重要な研究テーマなのである。現代の生命理論はこの問題に取り組む中で生命についての重要な知見を得るに至っている。

清水博は、プリゴジンの動的な秩序構造（散逸構造）についての議論などを用いながら、「生きている状態」を次のように説明している。

- 1) 生きている状態は、特定の分子や要素があるかないかということではなく、多くの分子や要素の集合体（マクロな系）が持つ、グローバルな状態（相）である。
- 2) 生きている状態にある系は、高い秩序を自ら発現し、それを維持する能力を持っている。
- 3) その秩序は結晶に見られるような静的秩序ではなく、動的秩序であり、これから説明していくようにその秩序を安定に維持するためには、エネルギーと物質の絶えざる流れを必要とする。

8. 「生きている状態」が物質からいかに生成するのかという問題。この生成（相転移）を説明するために導入されたのが、創発性概念。

10. 神経システムは、ニューロンの自己関係的なネットワークである。

- ・ニューロンの活動は先行するニューロンの活動に対する反作用
- ・脳は閉鎖的な自己参照的システム

9. 一般化：心的システム、社会システム

心的システムの要素は、思考内容、表象。

- ・意識・心は、思考内容から思考内容へ、表象から表象への連鎖
自らの活動を通して表象を継続的に産出して行く。

- ・物質的・エネルギー的な下部構造を土台にしている。環境からの寄与なしに自力で存立しているわけではない。しかし、システムの統一性と諸要素は、システム自身が産出する。

意識は脳の活動に依存しているが、脳・脳波・脳細胞活動と同一ではない。脳の活動は思考内容ではない・脳は思考しない。脳は意識の環境である。ニューロンの活動が思考・表象に転換される。

- ・構造的カップリング(*strukuelle Kopplung*)：システム間の依存／非依存
脳と意識とは別々に働くが互いに依存しあっている。志向性は脳に還元できない(心の哲学の問題)。

12. 創発性と心

・創発性概念は心・意識の階層へと拡張され——「心と身体は二元的な二つの成分ではなく、階層の異なる二つの概念である」(デイヴィス、105)、「心は『全体論的』なものである」(同書、106)——、心の哲学における理論形成に寄与しつつある。

・心的システム：思考内容、表象を構成要素としており、意識・心は、自らの活動を通して表象を継続的に産出して行く。思考内容から思考内容へ、表象から表象へと連鎖的に生成してゆく。心的システムは、物質的・エネルギー的な下部構造を土台にしており、環境(脳は心の環境である)からの寄与なしに自力で存立できるわけではない(意識は脳の活動に依存している)。しかし、脳・脳波・脳細胞活動と同一ではない。脳の活動は思考内容と同一ではなく、脳自体は思考しない。

- 11. ルーマンのシステム論。システムとは自らの働きによって自身の組織を継続的に産出する「オートポイエーシスのシステム」である。心の創発主義的理解(心あるいは意識は物質と生命という二つの系を基盤にして創発する)。

- 13. 「ルーマンは、意識は脳に対して創発的な秩序レベル(*emergente Ordnungsebene*)をなしていると言う。創発性という概念は、新しい水準の秩序の出現を指すものであって、これは、物質的・エネルギー的な下部構造の特性からは説明されない。」(クニール／ナセヒ、72)

14. 構造的カップリング(*strukuelle Kopplung*)

「意識と脳は、まったく重なり合うことなくはたらいっている。両者は融合しない。意識と脳とのこうした特殊な関係を、ルーマンは構造的カップリングという概念で言い表している。構造的にカップリングされたシステムは、互いに依存し合っている——しかも同時に互いに他に対して環境であり続けている。」(同書、73)

- 15. 「たいていの物理学者は下方因果には懐疑的である。なぜなら、彼らは現行の物理体系においては力を追加する余地はないと信じているからである」(Clayton/Davies,48)。創発主義を説得的な理論として仕上げるためには、乗り越えられるべき大きな壁が存在する。

- 16. クレイトンに従った創発性の概念規定。

11. キリスト教的人間学と脳・心1

(1) 創発理論から生の次元論へ

- ・「有機的生命の起源の問いはより重大である。ここにおいて二つの観点、つまりアリストテレス的観点と進化論的観点とが対立している。前者はデュナミス、可能態という用語によって種の永遠性を強調するが、後者はエネルギー、現実態において種の出現の諸条件を強調する。しかし、次のように定式化するならば、こうした相違が矛盾を生み出す必要はないことが明らかになる。すなわち、有機的なものの次元は本質的に無機的なものの次元に現在している、その現実的な出現は生物学や生化学によって記述される

諸条件に依存している、と」(Tillich, 1963,20)。「生の新しい次元の出現は条件づける次元における諸条件の布置(constellation)に依存している」(ibid., 25)

1. 自然哲学：創発理論から生の次元論(ティリッヒ)へ。

ティリッヒ『組織神学 第三巻』。

「生の多次元的統一性」(the multidimensional unity of life)と言われるように、次元概念は本質と実存の結合である生の現実性をいかに把握するのかという実在理解に関わっている。しかし、「生」を有限な存在者の現実性という意味に解する場合——この点でティリッヒは「生の哲学」を念頭においている——、

- ・まずこの生はどのようにして捉えられるのかが問われねばならない。この生を捉えるための方法としてティリッヒが用いるのは、『組織神学』自体の方法でもある「現象学」に他ならない(Tillich, 1963, 17)。生を捉える際にその出発点に置かれているのは、理論化に先だって具体的な経験において現前している生の諸現象を記述する「生の現象学」なのである。
- ・「生の現象学」の内容を「本質的要素と実存的要素の混合(mixture)」と「次元」概念、そして「可能性の現実化」という三つのポイントに従って要約。

2. 生は『組織神学』の体系に基づき、本質存在(第一巻)と実存存在(第二巻)に対して「本質的要素と実存的要素の混合」(ibid., p.12)と説明される——『組織神学 第一巻』で有限な存在における「本質存在」「実存存在」の二重性(duality)と言われたものに相当する——。これは「存在の現実性としての生」(life as "actuality of being")ともあるように(ibid., p.11)、存在するものの現実性としての生が本質と実存という二つの局面によって構成されることを意味している。

生の現象学の立場から言えば、まず「生」の現象(=現実性)が記述され、そこから本質と実存という存在の相が抽出されたと理解すべきであろう。「混合」「二重性」が意味するのは、生の現実においては本質と実存が相互に他へ還元できない区別された相であると共に、不可分な仕方では結合することによって現実性を構成している、という事態である。これは、生の現実には例えば科学的な分析が可能となる合理的な構造を有する(本質)と同時に、その合理的構造からは演繹できない疎外状況に陥っている(実存)ということであり、どちらの相が欠けても生の理解は一面的なものとならざるを得ない。その意味で、生の根本規定はこの両義性の内に見いだすことができるのである。

3. こうした二つの相の混合としての生は構造と生成の二つの観点から記述することができる。まず、生の構造論に相当するのが、生の次元論である。生の現実性は多様な諸要素の統一体として現象しているが——存在の多様性と統一原理の探求(ibid.p.12)——、問題はそれの際にいかなる用語(隠喩表現)を使用するかである。ティリッヒの選ぶ隠喩表現は「次元」(dimension)。生の現実性にふさわしい実在理解はどのようなものであるのかということ(ibid., p.15)。

- ・「次元」隠喩は空間的領域から採用されたものであるが、それは相互干渉が存在し得ないような仕方では存在の諸領域の相違を記述するのである」(ibid., 15)。次元概念の採用は、生の現象を構成する諸要素あるいは諸特性が相互に矛盾しあったり排除しあったりするものではない——あるいは、諸次元の間には価値的な上下関係は存在しない——という点を表現することを意図している。それと同時に次元論は、心と身体を分離可能な存在として実体化するような心身二元論(あるいは心身二層論)も否定する。確かに、諸次元は相互に区別された独自の質を持っているものの、空間を構成する縦と横と高さの三つの軸(次元)が互いに矛盾しあうことなく空間のすべての点で交差し共在しているのと同様に、すべての次元は生の現実において一つに統合されている。このような空間を構成する次元の特性が、生の現実性を記述するのにふさわしいというのが、ティリ

ッヒの見解なのである。

4. 構造的観点から。ティリッヒは無機的次元、有機的次元、心理的次元、精神の次元を区別する (ibid., pp.17-30)。それらはそれぞれ物質、生命 (狭義の生)、心、精神と言い換えてもよい。

・諸次元はそれぞれが他の次元に還元できない固有の实在性を有すると同時に、本質の相においては互いに矛盾し合うことはない — 矛盾が問題化するのはい実存という相においてである —。この点において、ティリッヒは還元主義的实在理解を否定する。

社会のいわゆる下部構造は宗教の物的存在基盤であったとしても、宗教の現実性は下部構造には還元できない、つまり宗教はそれ固有の法則性を有する独自のリアリティーなのである。

・しかし、諸次元をばらばらに実体化することもできない。例えば身体なしの靈魂の不死性をティリッヒは認めない (ibid., pp.409-412)。生命の存在は物質の存在を前提とし、また心の存在は生命を、精神の存在は心をそれぞれ前提としている。こうした諸次元間の順序の議論はティリッヒが進化論的図式を認めていることを意味している。物質レベルにおける複雑度の増大が自己組織化プロセスを介して次の实在の次元である生命を生み出すという最近のシステム論の議論自体はティリッヒの念頭にはなかったとしても、後に見るように、現代の自然科学が提示する物質、生命、心、精神からなる自己組織化の連鎖は、ティリッヒの次元論の説明として読むことができる。

5. 生の記述は構造とともに生成の観点を要求する。なぜなら、「生は可能的存在の現実化として定義される」からである (ibid., p.30)。すでに言及したように、諸次元は単に空間的に併存するだけでなく、それらの間には生成の順序と言うべき関係性が認められた。ここにおいては、生の生成に関して、新しい次元の生成と必ずしも新たな次元の生成を伴わない生成一般とを区別して説明することにしよう。

・新しい次元の生成。これは無機的次元から有機的次元が、有機的次元から心の次元が、そして心の次元から精神の次元が生成するという問題であり、それぞれ生命の発生、心の発生、文明の発生といったテーマにおいて従来論じられてきたものである。このような新しい次元の生成に関して — 「次元の現実化は宇宙の歴史の内における歴史的出来事である」 (ibid., p.26) —、ティリッヒはアリストテレスの運動論と進化論とを結びつけて議論を進めようとする。

6. フランクルの場合 (杉岡良彦『医学とはどのような学問か——医学概論・医学哲学講義』春秋社、2019年)。

「フランクルは、身体—心理—精神的統一性と全体性を建立し基礎づけ保証するものが精神的な人格であるとのべる」、「人格は個人であり、分割できない。そして分割できないのは人格が統一体 (Einheit) であるからだ」と述べる。また人格は合計することができない。それは人格が統一体だけではなく、全体 (Ganzheit) でもあるからだ」と主張する、「M・シェラーに依拠し、人格を「いろいろな精神作用の担者であると同時にそれらの『中心』である」と理解する。」 (256-257)

「フランクルの次元的人間論 (dimensional anthropology) である。例えば比喩的に、人間を一つの円錐と考え、それを三次元空間から二次元の平面に投影すれば円や三角形という異なる像があらわれる。しかし、元は同じ一つの円錐である。身体 (生物)・心理・社会・精神など、一人の人間が多面的に見えるのは、比喩的にはいくつかの平面への投影図から人間全体と理解しようとするためであると考えられる。つまり、人間は、「多様性にもかかわらずの統一 (unity in spite of multiplicity)」 (Frankl 1988, p.22) と理解される。」 (257)

(2) 生の次元論と健康・病

7. 後期ティリッヒにおける「健康や病」。

・「健康・病」の問題群。前期ティリッヒにおける「文化の神学」の構想に遡る。

ルフェーブル編集の論文集所収の諸論文からその全貌を知ることができる(LeFevre, 1984)。「宗教と健康との関係」(1946)と「健康の意味」(1961)とを比較すること。

この二つの論文は、宗教的な救済を、癒しとの、そしてさらには健康との関わりで扱っている点で共通の問題意識にしたがっており、そこには一貫した議論の展開を確認することができる。とくに重要なのは、癒し、健康、そして病という現象が、多様な諸観点から、しかも諸観点の区別を超えたそれらの相互連関において論じられていること(多様性とその統一)。例えば、人間存在の癒し・治療には、通常の医療機関における身体的治療や精神分析による心理的治療から呪術的治療や宗教的癒しに至るまで多様な方法が存在し、しかもそれらは様々な相互連関において結びついている。

・「根本的な問題がまだ残っている。精神的実在と身体的実在に対して、人間本性の<中間的領域>はいかなる構造的関係を有するのか。もしこの問いが答えられるとするならば(もちろん、すべての科学的答えと同様に暫定的な仕方であったとしても)、癒しの諸方法相互の諸関係がそこから導き出されるであろう。」(Tillich, 1946, 47)

・46年論文。人間存在に関して身体的、心的、精神的の三つの領域が区別され、この人間存在の統一を指し示すものとして「人格」概念が位置づけられている(ibid., 47-48)。

この議論の前提とされるのは、古代以来の身体、魂、精神(霊)という三分的人間論(これは治療方法の三分に対応する)であるが(ibid., 24-28)、「霊的癒し(spiritual healing)は精神的癒し(mental healing)の深みの次元(the depth-dimension)である。

・「それは、必ずしも現実的ではないにしても、精神的癒しの中に潜在的に現前している。たとえ、それが精神療法的な状況の厳粛さや深遠さにおいて表現されているにせよ、あるいはまた明確に宗教的な諸顕現において表現されているにせよ、そうなのである。」(ibid., 50)、次元論への展開が予示。

8. 人間存在における癒しの諸方法の区別と相互連関という問題は、人間的生の現実における次元論の展開を促しつつ、それを理論的枠組みとすることによって次第により整理された形で議論されるようになる。

・61年論文。「物理的次元、化学的次元、生物学的次元、心理的次元、精神的次元、歴史的次元」という多次元の統一体としての生という理解が明確に表明され、それに基づいて、健康、病、治療についての次元論が示されるのである(Tillich, 1961, 167-173)。

・特定の次元に限定された「分離的治療」は医療行為としては不可避的であるが、人間存在の病とその癒しを全体として見たときに、癒しは他の諸次元の治療方法との共働を要求する(全体的治療)。

・「人間イエスに適用されたこの神話論的象徴(普遍的治癒者の象徴。論者補足)がきわめて鮮明に示しているのは、宗教的なものと医学的なものとの統一性なのである。もし救済が癒しの意味で理解されるとするならば、宗教的なものと医学的なものとの間には対立ではなく、きわめて密接な関わりが存在しているのである。」(ibid., 173)

9. 次元論に基づく病、治療、健康の理解は、現代社会において宗教としてのキリスト教の存在意義を論じる上で重要なポイントとなる。

・現代医療の現場では高度に専門化し多様な治療方法にしたがって病の治療が行われている——それは人間の生を構成する次元の多様性からの当然の帰結である——。しかし、一人の人間の病の苦しみの複数の次元のゆがみが複合する仕方現象しているという事態、その人間の苦しみをいかにして癒すのかということ。もし、ある人物の苦しみを全体的に癒そうとするならば、その人の折れた骨をつなぎ、ホルモンのバランスを回復し、幼児期に作られた心のトラウマを解消し、家族関係を再建し、失業問題を解決するなど、一見そ

れぞれ別個の事柄に見えても実は複雑な相互作用の下にある諸次元のゆがみ全体を視野に入れねばならない。

・人間の病の現実を全体として取り扱うには、単なる治療方法の専門化や高度化だけでは十分ではなく、生の全体を包括的に扱う視点、あるいは治療の諸方法の統合が不可欠になる。これは、現代医療の現場で近年ますます自覚されつつある事態であり、宗教と科学の協力を積極的に模索する意味の一端はここに認められる。

10. 病と癒しの次元論と、新約聖書におけるイエスの宗教運動。

・癒しは病の治療であることを越えて、しばしば家族のもとに返れという命令（帰還命令）と結びつく。例えば「悪霊に取りつかれたゲラサ人の癒し」の物語（Mk.5:1-20）は、次のように結ばれている。

「イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。イエスはそれを許さないで、こう言った。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。」

・もし、「奇跡それ自体はとくに強調されず、癒された者への関心が最後まで持続する。具体的には、物語が家族（社会）への帰還命令をもって終る」という点がイエス伝承の最古層に属する特徴であるとするならば（荒井献『イエス・キリスト』講談社、1979年、273）、イエスの治療活動が被治療者個人の精神的あるいは身体的な治療を越えた要素を本来含んでいたと考えるには十分な根拠がある——病は身体や心などの特定の次元に限定されるのではなく、病の苦しみは共同体からの疎外、自己からの疎外、そして宗教的な疎外（汚れとしての病）の複合的な効果として現前するのである——。

イエスの治療行為は病人の苦しみの癒しが家族関係の回復をもってはじめて完了することを示唆しているように思われる。宗教的観点から見た癒しは、身体的生命的次元や心の次元の他に、社会関係の次元と統一的に理解されねばならないのである。



・人間存在を諸次元の全体性に即して捉えようとするとき、神学は諸科学との協力関係を樹立するよう努力せざるを得ない。身体や心や社会関係におけるゆがみをそのままにして、魂の宗教的救いを論じたとしても、それは単なる抽象的な机上の空論と言わねばならない。人間の病の癒しという課題に関して、それに関わる諸次元に即した個別の問題（分離的治療）と、諸次元の統一性が提起する問題（全体的治療）とを、相互に区別しつつも統一的に捉えて行くとき、神学と科学の関係はきわめて具体的な問題として論じ得るものとなる。

・「生の過程の弁証法はそれぞれの次元において同一である」、「各々の次元においては他の諸次元が前提とされている」、「健康についてはその充実した観念と縮小された観念が存在する」、「完全な癒しはすべての諸次元のもとにおける癒しを包括している。」

（Tillich, 1961, 172）

11. 身体的な健康のみを追求し、健康の基準を能力（「できる」ということ）に置くような健康理解はあまりにも不十分であること。完璧な身体の健全さ（病の完全な排除）という現代の健康理解はそれ自体一種のユートピアであり、むしろ、「病」「老い」「障害」の現実に伴う様々な機能低下にもかかわらず、諸次元の統一体としての生全体においては生きる力に満ちあふれているような生の形態化が求められている。

12. モルトマンの健康論。

健康の問題については、「健康は多次元的に捉えられねばならない」（Moltmann, 1985, 273）とあるようにモルトマンも独自の健康の次元論を展開している。

・「次元」としては自己関係、社会関係、人間の生涯、超越的領域との関係という人間存

在を構成する関係の四つの次元。「病気である一人の人間の治療は、一つの次元で行われるのではなく、これら四つの病人の人的次元を顧慮し、彼の中にある<人間であることへの力> (die Kraft zum Menschsein)を強め再生しなければならない。」(ibid., 277)

・<人間であることへの力>とは、たとえ病や障害や老いといった否定的な状況下においても、それにもかかわらず自らの存在を肯定し得る力であって、ティリッヒならばこれを<生きる勇気・存在への勇気> (Courage to Be)と表現したであろう。

<参考文献>

1. Paul Tillich, *Systematic Theology vol.3*, The Univ. of Chicago Press, 1963.
Paul Tillich, "Religion, Science, and Philosophy," in: J. Mark Thomas (ed.), *The Spiritual Situation in Our Technical Society. Paul Tillich*, Mercer University Press 1988.
2. Perry LeFevre (ed.), *Paul Tillich. The Meaning of Health. Essays in Existentialism, Psychoanalysis, and Religion*, 1984.
3. 芦名定道「ティリッヒ——生の次元論と科学の問題」(現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』創刊号、2000年、1-16頁)。
4. Karin Schäfer, *Die Theologie des Politischen bei Paul Tillich unter besonderer Berücksichtigung der Zeit von 1933 bis 1945*, Peter Lang, 1988./
5. John Dominic Crossan, *The Historical Jesus. The Life of a Mediterranean Jewish Peasant*, HarperSanFrancisco, 1992.
, *Jesus. A Revolutionary Biography*, HarperSanFrancisco, 1995.
6. Jürgen Moltmann, *Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungslehre*, Chr.Kaiser, 1985.
7. 清水 博『生命を捉え直す——生きている状態とは何か』(増補版) 中公新書、1990年。文体統一のために一部修正して引用。
清水博「生命科学と宗教」(『宗教とは』(岩波講座転換期における人間9) 岩波書店、1990年。